

## ハワイ文化のキリスト教化

### ハワイのマジック・ナンバー

ある地域にキリスト教が伝わり、現地の人々がキリスト教を受け入れてキリスト教徒になれば、彼らはキリスト教化されたと言う。だが、ここで考えるキリスト教化とは、キリスト教がもたらす文化レベルにおける変化や変容のことだ。極言すれば、キリスト教文化と接触すれば、現地人がキリスト教に改宗しなくても文化のある側面においてキリスト教化は起こりうる。

ハワイでは古来「4」とその倍数は聖なる数字であり、伝統的な数の数え方においても基本となる数字であった。4を一つの単位として考え *kāuna* と呼んだが（1から順に数える場合の4は 'ehā）、一説によると、左右の手に魚を2匹ずつ掴んだり、タロイモやヤシの実を4つずつ束ねたりして数える習慣に由来するらしい。また数量の多いことを表す形容詞として、多い順に *lehu*, *kini*, *mano*, *lau* という単語があるが、それぞれ40万、4万、4千、4百という意味も持つ。ハワイの主島は8つあり、伝統的な最大行政区域はカウアイ島、オアフ島、マウイ島、ハワイ島の首長がそれぞれ治める4つの地域であった。聖なる数字に基づいて4人の首長が選ばれて各領土を治めたわけではないだろうが、興味深い一致ではある。

ハワイの最高位の神がカーネ、クー、ロノ、カナロアの4人であったのも、このハワイのマジック・ナンバーと合致する。ところで4人のうち、カーネとカナロアは、相補的で密接な関係を持つ神であり、二人のエピソードについては多くの伝説が残っている。しかし、海神カナロアは黄泉の国の支配者、邪悪な神と見なされることも多い。これは、三位一体にサタンを加えたキリスト教的世界観によってハワイの四大神が再解釈された結果であろうと指摘されている。このように、四大神がキリスト教の文脈で読み替えられるようなプロセスが現地文化のキリスト教化である。

### クリスチャン・フラの誕生

1970年代に始まるハワイアン・ルネサンスによって再び盛んとなったフラは、伝統文化を再認識し文化に対する誇りを取り戻すのに大いに貢献した。しかし、キリスト教徒にとってのフラの位置づけは必ずしも定まっておらず、「キリスト教徒はフラを踊ることができるのか？」という問いかけが、しばしばなされてきた。ハワイの神々を崇める歌や、自然や王族を称えつつも巧みに性行為について詠ったメレ・マイ（生殖器の歌）などは、キリスト教徒にとって相応しくないと保守的な信徒の間では考えられたし、腰を振ったり膝を開いたりするステップは好ましくないと見なす傾向も年配層の信徒の間には確かにあったのである。

しかしながら、文化や主権の回復が重要な課題となり、自らの文化とハワイ人であることに誇りを持つことが是とされるようになると、キリスト教徒のハワイ人は19世紀の宣教師のようにフラを全否定することが難しくなっていった。むしろ、ハワイ文化の象徴としてのフラをハワイ人キリスト教徒の信仰の主体性・独自性を表すものとして取り入れた方が、時節の流れに沿ったより望ましい選択となったと考えられる。こうしておそらく1980年代末頃からクリスチャン・フラと呼ばれるフラが教会で踊られるようになった。

フラでは手や腕の動きによって歌詞の意味を伝える。例えば、両手または片手を頭の上をなでるように回転させると「風」の意味になり、両手のひらを下に向け、前方に広げてから手のひらを返して胸元で交差させると「愛」の意味になる。クリスチャン・フラは、このように記号化したフラの手振りによって賛美歌の意味を表現する創作ダンスと言えるが、「礼節」に欠けるとされた腰を振ったり膝を開いたりする下半身の動きを省いている点に特徴がある。振り付けを改変し、ハワイの神々からキリスト教の神へと称える対象を読み替えたフラ、文字通りキリスト教化されたフラが、クリスチャン・フラである。

### ホオポノポノの変容

近年、ハワイのホオポノポノに関する書籍が日本でも数多く出版されている。また一つネイティブ文化がニューエイジ商品として消費されているのかと複雑な気持ちになる。だが、これらの中で紹介されるホオポノポノは、ここで取り上げるホオポノポノとは異なり、70年代後半に東洋哲学やニューエイジの思想を導入してセルフ・ヒーリングの技術として確立されたものだ。

ハワイ語の「ポノ (pono)」は「正しいこと；あるべき状態」を意味する。重複語の「ポノポノ」もほぼ同じ意味で「道徳的に望ましい整然とした状態」を指す。「ホオ (ho'ō)」は形容詞や名詞を動詞化する接頭辞であるので、「ホオポノポノ (ho'ōponopono)」は「正すこと；あるべき状態にすること」という意味になる。だが、一般にホオポノポノと言え、家族内の人間関係を望ましい状態にするために行われる「家族会議」を意味することが多い。

ハワイ社会では、病気や事故などは、家族の誰かが過ちを起こしたために起こると考えられた。そのような問題が生じると、家族全員が集まって、神に祈り、問題を特定し、それぞれが自らを振り返り、討議を重ね、罪を告白したり償ったりして、互いに許し合うことで問題の解決を図った。これがホオポノポノである。ホオポノポノの進行役はカフナや家族の長であり、祈りの対象は土着の神やアウマクア（祖先神）であったが、宣教師によって厳しく禁じられたために多くの知識が失われ、その全容は今では知ることができない。

現在、“伝統的な”ホオポノポノとして解説されているものは、祈りの対象が土着の神々からキリスト教の神に変わり、カフナに替わって牧師が指導し、時には *wehe i ka Paipala* と呼ばれる聖書の無作為拝読がなされるキリスト教化されたホオポノポノである。しかし、ホオポノポノの中心概念である「悔悛」と「許し」は、必ずしもキリスト教から取り入れられたものとは言えない。ハワイ文化にもそれに相当する重要な概念があり、その類似性ゆえにホオポノポノは容易にキリスト教化されたとも言えるのだ。祈りの対象が土着の神々からキリスト教の神に変わっただけで、ホオポノポノの本来の意図や考え方は全く同じであると主張される所以である。

ハワイ文化のキリスト教化は様々な局面で起こっているが、ハワイ人が無意識のうちに自文化のキリスト教化を受け入れている場合と主体的かつ意識的に自文化をキリスト教化している場合があるだろう。その違いについて詳細に比較検討する必要がある。